



ハッピー・マリード・ライフ

ダンマナンダ長老



翻訳 あつし



菩提樹文庫



「はじめに」

仏教徒の観点からは、結婚は神聖なものでも卑しいものでもありません。仏教は結婚を宗教的な義務とも、天に定められた秘跡ともみなしません。ある皮肉屋はこう言います。

「ある人々は結婚は天において計画されたものだと思ってるが、別の人々は地獄にもまた記されていると言っている」と。

結婚は基本的に、個人的な義務でもあり、社会的な義務でもありますが、強制的なものではありません。男性と女性は互いに結婚するか独身のままでいるかの自由を持たねばなりません。このことは、仏教が結婚に反対しているということを意味しません。この世の誰も、結婚が悪いとは言わないでしょうし、結婚に反対な宗教は存在しないでしょう。

実際に、あらゆる生きとし生けるものは、性的な生活（セックス・ライフ）の結果としての存在です。人間においては、社会が人類の種の永続化を保障するため、また若者がお互いをケアすることを確約するために、結婚の制度は生じてきました。子どもは、セックスの快楽を通して生まれてくるけれども、少なくとも子どもが育つまではパートナーたちは責任を持つべきである、という主張に結婚は基づいています。そして、結婚は、この責任を支え、成し遂げることを確実にします。

社会は、お互いに縊り合され、相互に依存している関係のネットワークを通してできあがってきています。あるグループやコミュニティにおいては、あらゆる関係は、他の人々を助け守ろうとする誠心誠意のかかわり合いです。結婚は、助け合い守り合う関係の、この強い網の目における、最も重要な部分を演じます。

良い結婚とは、衝動ではなく理解から、単なる耽溺からではなく忠実さから、次第に育ち、発達するべきものです。結婚の制度は、文化の発達のために良い基礎を与え、二人の個人の喜ばしい結びつきを育て、孤独や欠乏や不安を免れるようにします。

結婚においては、家族の世話と扶養において、相手に強さと道徳的勇気を与え、相手の能力に対して支えとなり感謝を伝えるような承認をお互いに明示し合い、お互いにパートナーを補い合う役割を発達させます。

結婚においては、お互いに相手を補完し合っているわけで、男性と女性のどちらかが優れているなどという考えはないはずで。結婚とは、平等な、優しい、寛容な、穏やかな、献身的な、パートナーシップです。

仏教においては、人は、その人を幸せな結婚生活に導いてくれる必要なアドバイスをすべて見つけることができます。もし人が本当に幸せな結婚生活に導かれたと思うならば、悟った師である仏陀によって与えられているアドバイスを放置すべきではありません。仏陀の言葉の中には、結婚しているカップルのため、また結婚について熟考している

人々のための、さまざまなアドバイスが与えられています。仏陀はおっしゃられました。

「もし男性がふさわしい理解ある妻を見つけることができ、女性がふさわしい理解ある夫を見つけることができるならば、どちらも本当に幸運である」と。

2章 愛と快楽の本性

・愛とは

愛には異なる種類のものがあります。それらはさまざまな表現をされています。母性愛、兄弟愛、感覚的な愛、感情的な愛、性的な愛、利己的な愛、自分を度外視した愛、普遍的な愛…。もし人々が単に自分の現世的で利己的な愛のみをお互いに発達させるならば、この類の愛は長くは続くことができないでしょう。真実の愛の関係においては、人はどれだけ得ることができるかを問うべきでなく、どれだけ与えることができるかを問うべきなのです。

美しさや容姿や若さが消え始める時、愛の身体的な側面のみを考慮する夫は他の若い女性を得ようとするでしょう。この類の愛とは、動物的な愛、もしくは肉欲です。もし男性が本当に相手への人間的な心遣いの表現としての愛を育てているならば、彼は自分のパートナーについて、外面的な美しさや身体的な魅力のみに重きを置くことはないでしょう。パートナーの美しさや魅力は、心にあるべきものであり、見えるものにあるものではありません。同様に、仏陀のみ教えに従う妻は、たとえ夫が年をとっても、病める時も貧しき時も、決してその夫をなおざりにはしないでしょう。

「現代的な女性が一ダースのロミオを持つジュリエットでありたいと思うことを、私は恐れています。そうした女性は冒険を愛します。…現代的な女性は、雨風や日差しから身を守るためではなく、注意を引くために服を着ます。そうした女性は、化粧し、目立つようにすることによって本来の姿から良くなろうとします。」（ガンジー）

・性（セックス）とは

性（セックス）はそれ自体としては「悪い」ものではありません。とはいえ、セックスへの渴望や誘惑はいつも心の平安をかきみだすものではありません。ですので、精神的な成長にはセックスは役に立ちません。理想的な状況では、セックスは、パートナーがともに平等に与え受けとるところにおける、感情的な関係を深く満たす、身体的な絶頂です。

私たちが「西洋的」な文化と呼ぶものにおける、マスメディアを通じた、商業的なグループによって、描かれる愛の描写は、「本当の」愛ではありません。動物はセックスしたい

と思う時、その「愛」を示しますが、セックスを経験した後は、単に愛を忘れます。動物にとっては、セックスは単に生殖のために必要な本能的な原動力です。

しかし、人間は、愛という概念において、ずっと多くのものを提示しています。義務と責任は、人と人との関係において、夫婦がひとつであるために、そして調和と理解を維持するために、重要な要素です。

「セックスは、結婚生活における幸福にとって、最も重要な要素というわけではありません。セックスの奴隷となった人々は、結婚における愛と人間性を台無しにしてしまうことでしょう。そうではなく、女性は男性の肉欲の対象としてのみ自らをみなすことをやめねばなりません。その解決手段は、男性の手の中よりも女性自身の手の中により多くあります。女性は、単に男性を喜ばせるために自分を飾ることを拒否しなければなりません。たとえ夫に対してであっても。もし女性が男性と平等のパートナーであることを望むならば、女性は自らの尊厳を高めるために服を着るべきであり、セックス・シンボルになるためであってはなりません。性的な嗜好を満たすための結婚は結婚ではありません。情欲です。」
(ガンジー)

愛は実際にセックスから生まれるかもしれませんが、その逆も同様に真実です。つまり、セックスは愛の表現です。理想的に幸せな結婚生活においては、愛とセックスは両方とも切り離せないものです。

・仏陀が説かれていること

男性と女性がお互いに対して持つ感情について、私たちは仏陀の教えを学ぶことができます。仏陀は「女性の姿かたちよりも多くの男性の関心をひく対象をこの世に見たことはない」と言っています。同時に、女性にとっての主な関心は男性の姿かたちです。生来、女性と男性はお互いに現世的に喜びを与えるものだというのをこのことは意味しています。人は、他の対象からはこのような幸福を得ることはできません。

とても注意深く観察するとき、私たちは、すべての喜びを与えてくれるものの中で、男性と女性の姿かたちが同時にすべての五感を喜ばせることができるようには、同時にすべての五感を喜ばせてくれるものはこの世には他にはないと気づきます。古代ギリシャ人はこのことを知っていました。なので、元来男性と女性はひとつのものだったと言っていました。男性と女性は分離されて二つの部分に分割されたので、常に男性と女性とが再び結合することを求めるようになったと。

・ 快楽とは

若い人々は生来、現世的な喜びに耽りがちです。現世的な喜びは、善と悪事を両方とも含むことができます。善いことには、音楽や詩やダンスや良い食べ物や服やそういった物事を楽しむことが含まれます。それらは体を害することはありません。それらは単に私たちを、存在のはかない本質と不確かさを見る事からそらさせ、したがって自我の本性に気付くことができるようになることを遅らせるのみです。

若者の能力や感覚はとても新鮮で機敏なものです。若者は、五感すべてを満たすものにとっても鋭敏です。ほとんど毎日、若者はなんらかの形の快楽を経験するための方法や手段を計画し工夫しています。まさにその存在の本性によって、人は決して完全には、人が経験する快楽にはなんであれ満たされることはないし、その結果としての渴望は次々により多くの不安と心配をのみ生み出します。

深くそのことを考えるとき、私たちは人生とは夢以外の何物でもないことを理解することができます。最終的に、私たちがこの人生に対する愛着から得るものとは何でしょうか？単により多くの心配と失望と不満のみです。

私たちは、快楽によって束の間楽しむことはあるかもしれませんが。しかし、最終的な分析においては、人生の本当の目的とは何かを理解することにチャレンジしなければなりません。

人が、感覚的な快楽への渴望をやめるとき、そして他の人々と一緒にいることに身体的な心地よさを見つけることを求めない時、結婚への要求は生じません。苦と世俗的な喜びは、ともに渴望と愛着と感情の結果です。もし人が、非現実的な方策を用いることで自らの感情をコントロールし抑圧しようとするれば、心と体においてかえって混乱を生じさせてしまいます。ゆえに、人間の情念をいかに扱いコントロールするか、私たちは知らねばなりません。この情念を悪用することや誤用することがなければ、私たちは適切な理解を通じて欲望を飼い馴らすことができます。

3章 結婚生活の現実

ジョン・J・ロンビンソン（アメリカの著述家・歴史家）は彼の著作『あるがままについて』の中で、愛やセックスおよび結婚生活について以下のようなアドバイスをしています。

「注意深く慎み深くありなさい。独身より結婚することはずっとたやすいことです。もしあなたが正しい結婚相手を持つならば、本当に天上のように素晴らしいことです。しかし、もしそうでないならば、あなたは絶え間なくあなたをしばりつける地獄に二十四時間日常

的に暮らすこととなります。人生は実際、奇妙なものです。どういうわけか、あなたが正しい相手を見つけた時、あなたは心の中でそのことを知ります。それは単なるその瞬間でののぼせあがりのことではありません。しかし、セックスの力強い衝動は、若い人を向こう見ずに盲目的な行動に駆り立てるし、人は彼の感情をそんなに信頼することはできません。もしも飲んだり泥酔しているならば、このことは特に真実です。暗い酒場では最もひどい女性も時にヴィーナスのように見えるし、彼女の魅力はさからうことができないものになります。愛はセックス以上のものです。とはいえ、セックスは男性と女性との間の生物学的な土台ではあるのですが。愛とセックスはすべて相互により合わさった、まぜこぜになっているものなのです。

・問題

ほとんど毎日私たちは、誰かが結婚について不平不満を言っているのを聞きます。幸せな結婚についての物語を聞くことはとても稀です。若い人々はロマンティックな小説や映画を見て、結婚は薔薇色の生活だとしばしば結論します。不幸なことに、結婚は考えるほどは甘くないものです。結婚と問題は相互関連しています。人は結婚する時、これまでに予期したことも経験したこともなかった問題と責任に直面するであろうことを、覚えていなければなりません。

人はしばしば考えます。結婚することは義務であり、結婚は人生においてとても重要なイベントであると。しかしながら、うまくいく結婚を確実にするためには、カップルは、彼らの中にあるかもしれない違いを何であれできるだけ小さくすることにより、彼らの人生を調和させねばなりません。

結婚の問題は皮肉屋の以下のことばを促します。めくらの夫とつんぼの妻の間の結婚においてのみ、平安な結婚生活がありうるだろう、なぜならば、めくらの妻は夫の欠点を見ず、つんぼの夫は妻がガミガミ言うことを聞くことができないからであると。

・分かち合いと信頼

結婚の問題の主要な原因のひとつは、疑いと不信です。結婚は祝福ですが、多くの人は理解の不足により呪いにしてしまいます。夫と妻はどちらもお互いに暗黙の信頼を示すべきであり、お互いの間に秘密を持つとはなりません。秘密は疑いを生み、疑いは嫉妬に導き、嫉妬は怒りを生み、怒りは反目の原因となり、反目は、離婚や自殺あるいは殺人事件さえも引き起すかもしれません。

もしカップルがその日その日の暮らしの中で痛みや喜びを分かち合うことができれば、彼らはお互いを癒し元気づけ、不平不満を最小化することができます。したがって、妻や

夫は喜びのみを経験することを期待すべきではありません。結婚には多くの痛みも伴い、みじめな経験にも直面しなければなりません。カップルは、自分たちの重荷や誤解を減らすための強い意志の力を持たねばなりません。お互いの問題を話し合うことは、カップルに、お互いへのより良き理解と、ともに生きているということへの自信をもたらすことでしょう。

男性と女性は、問題や困難に直面した時に、お互いを慰め癒し元気づける（コンフォートする）必要があります。もし相手の重荷を進んで分かち合おうとする人がそこにいれば、不安定やそわそわした感情は消えてなくなり、人生はより意味深く、幸せで、面白いものになることでしょう。

・感情によって盲目となることについて

二人の人が愛し合っているとき、彼らは良い印象を与えようとするために、お互いに自分の性質や性格の最も良い側面のみを示す傾向があります。愛は盲目であると言われる。したがって、愛においては、人はお互いの性質の暗い側面を完全に忘れてしまっている傾向があります。

実際に、お互いに相手に対して自らの輝かしい特質を際立たせようとするならば、そして愛にそれほど夢中になっているならば、彼らはお互いに「額面」（フェイス・ヴァリュー）のみを受け入れる傾向があります。それぞれの恋人が相手を失うことへの不安から、自らの性質の暗い側面を明らかにしないことでしょう。いかなる個人的な欠点も、いわば、お互いを勝ち取るチャンスを台無しにしないように、カーペットの下で慎重に掃除されているのです。結婚のあとで相手を正すことができるだろうし、それらの欠点とともに生きていくことができるだろうと考え、「愛はすべてに勝つ」と考えて、恋愛関係にある人はパートナーの欠点を知らないふりをする傾向もあります。

しかしながら、結婚のあとで、最初のうちのロマンティックな気分が擦り減ってくると、お互いの性格の本当の性質があらわれてきます。そのとき、両方の側に多くの失望が生じ、お互いの奥深い感情を今まで封じ込めてきたみんなが知っているようなヴェールが取り外されて、お互いの本当の性質をあらわにします。そのとき、幻滅が始まります。

・物質的な必要性について

愛はそれ自体では、新鮮な空気や太陽のもとで存続しえませんが、現世は、物質的な世界であり、物質的な必要性を満たすためのものであり、適切な会計と予算が不可欠です。そのことなしでは、いかなる家族も快適には生活できません。そのような暮らしは以下のこと

ばを的確に裏付けることでしょう。「貧しさが戸口をノックする時、愛は窓から飛び去っていく。」

これは、結婚をする時に人が金持ちでなければならないということの意味するものではありません。しかしながら、もし人が、安定した仕事と注意深い計画性によって生活の基本的な必要性を満たすならば、多くの不必要な心配は結婚から取り除かれるということです。

貧しさによるつらさは、もしカップルの間に完全な理解があれば、避けることができます。パートナーは両方とも、足を知る事の価値を理解しなければなりません。どちらも「私たちの問題」としてすべての問題を扱わなければなりませんし、長きにわたる人生のパートナーシップにおける真実の精神において、「いい時」と「わるい時」とのすべてを分かちあっていかなければなりません。

・結婚する前のアドバイス

初期仏典の中の増支部経典には、結婚を前にした若い女性たちに仏陀が与えた、いくつかの貴重なアドバイスが含まれています。新たな婚姻による家族との困難を自覚することで、女性は義理の母や父に敬意を払うことを命じられ、自分の両親に対するように愛情深く仕えねばならぬことを言われています。彼女たちは、夫の親戚や友人に敬意を払い尊敬するように期待され、そういうわけで新しい家庭の中で愛想よく幸せな雰囲気を生み出すようにと。

彼女たちはまた、夫の性質を学び理解するようにアドバイスされています。夫たちの行動や性格、気質を確認し、新しい家庭でどんな時も役に立ち協力的であるようにとアドバイスされています。彼女たちは礼儀正しくあるべきで、夫の稼ぎに対して親切で注意深くあるべきで、すべての家庭の支出が適切に管理されるように取り計らうべきだと言われています。こうしたアドバイスは、仏陀によって二千五百年以上昔に与えられたものですが、今日でもいまだに価値のあるものです。

4章 仏教徒における結婚の考え方

「生まれることと苦しみ」について言われてきたことを見て、ある人々は仏教の言っていることは結婚生活に反対していると批判してきました。彼らは間違っています。仏陀は決して結婚生活に反対したことは述べていません。しかしながら、仏陀は、結婚の責任を担うときに人が直面しなければならないあらゆる問題や困難や心配事を指摘しています。仏陀がある人に結婚における問題を単に警告したという理由だけでは、仏陀が結婚をとがめたということの意味することにはなりません。

結婚という行為はそれ自体では、人がいまだにより多く身体的な世界に愛着を持ち、なので精神的な能力が渴愛や愛着や人間的な感情の影響を受けていることを含意しています。それは自然なことではありますが、いろいろな問題が生じてくることでもあります。この問題は、私たちが他の人々の必要性を考慮しなければならない時に、そして他の人々が必要としていることに従わなければならない時に起こります。

・宗教の役割

自我の本性を深く分析することは、私たちが自分の問題や心配やみじめさが生じてくるもととなるものを理解することに、そしていかにそれらを克服するかにおいて、とても助けとなる重要なものです。この世で、宗教的なアドバイスは、静穏な生活を維持するために重要なものです。しかしながら、人はいかなる宗教の奴隷にもなるべきではありません。人は宗教のためのものではありません。宗教が人のためにあるのです。このことは、品位ある方法において、自らの向上と自らの幸福のために、どのように宗教を役立てるかを、人は知らなければならないことを意味しています。

盲目的な信仰や強制によって、ある宗教の誓いや教えや命令に単に従うことによって、それらのことを遵守する義務の束縛のもとに自分があることを考えても、適切な理解を育むことはないでしょう。

仏教におけるひとつの重要な側面は、仏陀がいかなる宗教的な法律も命令も課していなかったということです。仏陀はユニークな先生でした。仏陀は、私たちの生活方法に適して私たちを支えるために規律となる慣例を始めました。その教えに従う人々は自発的にそのアドバイスに従ったわけで、義務的な宗教の法律として従ったわけではありませんでした。そのアドバイスに従うかどうかは私たち次第であり、何が自分や他の人々にとって良いことかという私たち自身の理解や経験を介したものだのです。試行錯誤を通じて、私たちは平安と幸福をもたらすそのアドバイスに従うことを学ぶことでしょう。

人は世俗的な生活の本性を理解しようとすべきです。問題に直面しなければならないことを知ることによって、人は心を強くすることができ、結婚するならば起こるかもしれない問題に直面した時の準備をよりしておくことができることでしょう。宗教は問題を克服することを助けるために重要です。若かった時に学んだ宗教的な原則はなんであれ、誤解や失望や不満を避けることに適していることでしょう。同時に、宗教を通じて学んだ、忍耐や理解のようななんらかの良い性質は、平和な結婚生活に私たちを導くことに役立つ重要な資産です。

通常、相互理解の不足によって、多くの結婚したカップルはみじめな生活に導かれます。

その結果は、なんの罪のない子どもまでも苦しまねばならないこととなります。幸せな結婚生活に導かれるために自分の問題をいかに取り扱うかを知っていることはずっと良いことです。宗教はこのことをなすにあたってあなたを助けることができます。

5章 宗教的なディレンマ（板挟み）

・個人の権利

ユダヤ・キリスト・イスラムなどの中東起源の一神教に属する人々の間で最も大きな関心となる物事の一つは、結婚前の改宗の問題です。一方、仏教徒とヒンドゥー教徒とでは、結婚式の前に同じ宗教にカップルが属することを要求することは決してありません。多くの他の宗教の人々も、この寛容を活かす傾向にあります。

結婚は、多くのロマンティックな小説が言うところとは反対に、各自が自分のアイデンティティを失うほどまでの、二人の全き完全な融合を意味しません。宗教がパートナーのどちらにも同じ宗教的なラベルを持たねばならないと要求する時、その人自身が欲することを信じるという個人の基本的な人権をその要求は否定しています。

社会は歴史を通して、「多様性の中での統合」が可能だけでなく望ましいことを示してきました。多様性からは、より大きな尊敬と理解が生じます。このことは、結婚にもまた適用されるべきです。夫と妻が自らの信条を維持し、かつお互いに対立することなく幸せな結婚生活を維持することができるという、多くの生きた事例が世界中にあります。

仏教徒は同じ家庭の中でさえも、他の宗教の存在に反対することはありません。不幸なことに、この寛容の態度は、あらゆる方法で改宗者を得ようと努めるあくどい宗教家たちによって悪利用されてきました。知性的な仏教徒は、この計略に気付いていなければなりません。知性的な人間とは、その人自身の確信によって信仰するという本音を本当に理解しているものです。そうした知性的な人間としての自尊心が存在しないところでは、寛容な仏教徒の信条は他の宗教の人為的な要求をただ単に満たすだけになってしまうので、断念すべきです。仏教徒は、パートナーが仏教の信仰をいただくことを要求しません。また、自らの信条を明け渡すべきでもありません。

・結婚後の憂鬱について（マリッジ・ブルーの後に）

若い人々が恋に落ちている時、彼らは結婚できるまでは多くの犠牲を払う心構えがあります。しかし、数年後、うまくいく結婚を築くための本当の仕事が始まる時、不平不満が始まります。「愛」のために、自らに深く根ざした宗教的な信条を断念したパートナーが、

そのことを後悔し始めた時、無益な誤解が起こります。結婚に倦怠を感じる時に、それらのことはさらなる緊張を加えます。そこでは反目が起こることでしょう。そして通常、それらの反目の主な原因のひとつは、子供たちがどちらの宗教に属すべきかという問題になることでしょう。

それゆえに、人にとって最も重要なことは、もし改宗のプロセスが伴っているならば、それは本当の確信に基づかねばならず、単なる便宜や強制であってはならないということです。仏教徒は、選択するという個人の自由を維持します。この原則は万事において尊重されるべきです。

・儀式

結婚をするにあたって仏教徒の儀式や手続きには特別なものは何也没有ません。仏教は、異なる国々において人々によって実践される伝統や文化を認めています。したがって、仏教徒の宗教的な儀式は国と国とで異なるものです。一般的に実際に、祝福のための宗教的な儀式やカップルにアドヴァイスを与えることは、習慣的にお寺の中か家においてかいずれかで、結婚により大きな意義を与えることとして行われています。

今日、多くの国では、祝福の儀式に加えて、宗教的な組織もまた、法的な結婚の承認の確認とともに、挙式し登録することで結婚を権威づけてきました。おしなべて言えば、最も重要なポイントは、カップルがお互いに幸せな時だけでなく、困難に直面するどんな時であっても、お互いに協力し理解し合う意志において、全き誠実さを持っているということです。

6章 安全、尊敬、そして責任

・不安定な感覚について

これまで、法的に認められていないような結婚は存在しませんでした。男性と女性は相互に夫と妻としてお互いを受け入れることを決め、その後、共に生活しました。結婚は地域共同体の存在の中で執り行われましたし、離婚は稀でした。最も重要なことは、それらの過去の人々が本当の愛を育み、お互いの責任を尊敬していたということです。

結婚の法的な登録は、安定を確かなものとし、所有権と子どもを守るために、今日では重要なものです。不安定な感覚を持っていることが原因で、カップルは自分たちの法的な制約を確かなものとするために法的な結婚を行い、義務を怠ったりお互いを悪く扱ったりしないようにします。今日、一部のカップルたちは、もし離婚した場合の財産所有権をめ

ぐって法的な契約をさえ作成しています！

・夫と妻

仏教の教えによれば、結婚において、夫は妻から以下のことを期待できるとされています。

- ・愛
- ・注意深さ
- ・家族の義務
- ・誠実
- ・子どもの世話
- ・節約
- ・食事の用意
- ・自分が混乱し動揺している時に落ち着かせてくれること
- ・万事に優しいこと

その代わりに、妻が夫に期待できることは、以下のこととされています。

- ・思いやり
- ・礼儀正しさ
- ・社交性
- ・安全
- ・公正
- ・忠実さ
- ・正直さ
- ・良い話し相手であること
- ・道徳的・精神的な支援

これらの感情や感覚の側面とは別に、カップルは日々の生活の状況や家計や社会的な義務を大事に担当しなければならないことでしょう。したがって、あらゆる家族の問題についての夫と妻がお互いによく相談することは、なんであれ起こるかもしれない問題点を解決していくにあたって、信頼と理解のある雰囲気を生じさせることに役立つことでしょう。

・カップルへの仏陀のアドバイス

I、妻

結婚生活における女性の役割についてのアドバイスの中で、仏陀は家庭の平和とハー

モニーが女性によるところが大きいことを高く評価しています。女性が育てるべき性格、あるいは育てるべきでない性格についての多くの教えを仏陀が説いた時の、仏陀のアドヴァイスは現実的で実践的なものでした。さまざまな機会に、仏陀は結婚した女性に以下のようにすべきだと助言しています。

- a) 夫に対して悪い思いを懐かないこと
- b) 冷たかったり、とげとげしかったり、横暴であることがないこと
- c) 浪費すべきでなく、自分の財産の範囲で節約し生活すること。
- d) 夫が苦勞してやっと手にした稼ぎと財産を守り蓄えること
- e) 心と行動とにおいて、いつもよく気がつき、貞節であること
- f) 誠実であり、いかなる不倫行為についての思いも懐かないこと
- g) 話すことにおいて洗練されており、行為において礼儀正しいこと
- h) 親切で、勤勉で、よく働くこと
- i) 夫に対し心のこもった思いやりがあり、母が自分のひとり子を守るような愛と関心と等しき態度
- j) 慎み深く、丁寧であること
- k) 冷静で、穏やかで、理解あること。妻であるというだけでなく、友として、必要な時にはアドヴァイザーとしての役目を果たすこと。

仏陀の時代においては、他の宗教の指導者も夫に対する妻の義務や責務を説いていました。特に妻が夫のために子どもを産む義務を強調し、そのことを誠実な奉仕とみなし、結婚の幸福の条件としていました。

一部のコミュニティでは、家族において息子を持つことがとても特別なことです。それらの人々は、来世が良いものとなるための葬式儀礼を行うために息子が必要だと信じています。最初の妻が息子を持つことに失敗すると、男性は息子を得るために他の女性を持つ自由が与えられます。仏教徒はそのような信仰は支持しません。

カルマの法則について仏陀が教えたことによれば、人は己の行為とその結果に責任があります。息子か娘のどちらが生まれるかは、父や母によってではなく、その子どものカルマによって決められます。また、父や祖父の幸せは、息子や孫の行為によるわけではありません。各自が自分の行為に責任があるのです。

つまり、妻を責める人は間違っているのであり、息子が生まれなかった時に不満を感じる人も間違っているのです。このような啓発的な教えは、多くの人のももの見方を正しくすることに役立ちますし、また、息子を産むことができないと「先祖への儀礼」ができないのではないかという女性たちの心配を減らすことに役立ちます。

妻の夫に対する義務は、儒教の規範の中にもありますが、しかし儒教の規範は妻に対する夫の義務や責務には重きを置きません。しかし、シガーラ教誡経（善生経）の中で、仏陀は明らかに夫の妻に対する責務とその逆の場合も同様に言及しています。

II、夫

夫がいかに妻に対する務めを果たすべきかということの答えとして、夫は常に妻を尊敬し敬意を払うべきことを断言しています。そのために、妻に対して誠実であること、家庭をやりくりするために必要な権限を妻に与えること、よく似合う飾りをプレゼントすることを述べています。このアドヴァイスは、二千五百年以上前に与えられたものですが、今日もなお依然として真実です。

自らを優越したものだと思なす傾向のある男性の心理を知っていたので、仏陀はシンプルな提案によって女性の地位を引き上げて目を見張るような変化をもたらしました。その提案というのは、夫が妻を尊敬し敬意を払うべきだということです。夫は妻に誠実であるべきです。つまり、あらゆる意味で結婚関係における信頼を維持することで、夫は妻に対する結婚の責務を満たし維持するべきです。

夫は、一家の稼ぎ手ならば、家をあけることでしょう。したがって、財産と家における家計の管理者・分配者として妻をみなすべきで、その妻に、家の中の、あるいは家族の義務を信用してゆだねるべきです。よく似合う飾りを妻に与えるということは、夫の愛のしるし、妻に対して示す配慮と注意のしるしであるべきです。このしるしとしての実践は、遠い昔から仏教徒のコミュニティでは行われてきました。不幸なことに、現代の文明の影響のためにこの実践はなくなってしまう危険のもとにあります。

・過去

過去において、大半のコミュニティの社会的な構造は私たちが今日見出すものと異なっており、夫と妻はお互いに相互依存していました。パートナーシップにおけるそれぞれの役割をよく各自が知っていたために、相互理解と、相互の関係が安定して存在していました。公衆の面前でお互いに抱き合うことで、一部の夫婦が他人に示そうとする「愛」は、本当の愛や理解を必ずしも指し示すものではありません。過去においては、結婚したカップルは自分たちの愛や内なる感情を公には示しませんでした。彼らは深い、以心伝心とさえも言える理解と、お互いへの敬意を持っていました。

ある国々においては、妻が夫の死後は自分の人生を犠牲にしなければならず、未亡人は

再婚を禁じられるという、古来の習慣を人々が持っていました。そうした習慣は仏教とは無関係です。仏教は、妻を夫よりも下位の存在とはみなしません。

・現代の社会

一部の女性たちは、家族の養育に自分たちが専念していることが、自分たちの品位を下げ保守的なことではないかと感じています。過去において女性がひどく扱われてきたことは本当ですが、子どもを育てることが女性によるという考えは、女性の生まれつきの弱さによるというよりも、男性の側の無知により多く起因するものでした。

教育、職業、政治、その他の道の分野において、男性と平等になろうと長年の間、女性たちは奮闘してきました。彼女たちは今や大部分男性と同等です。男性はおおむね生まれつきアグレッシブで、女性はより情緒的です。家の中の場では、特にアジアでは、男性は家族の長としてより支配的で、一方女性は受動的（パッシブ）なパートナーのままの傾向があります。

覚えておいてください、「受動的」（パッシブ）とは、ここでは「弱い」ことを意味しません。むしろ、「柔らかさ」や「優しさ」というポジティブな性質のことです。もし男性と女性が男らしさと女らしさを自然から受け継いでおり、そしてその尊敬すべき強みを認識するならば、その考え方は男性と女性の間には快適な相互理解をもたらすことができることでしょう。

・ガンジーの言及

「私は女性に適切な教育というものがあると信じています。しかし、男性を模倣したり、男性と競い合うことによって、女性がこの世界に貢献することはないだろうと信じています。女性は男性と競い合うことはできます。しかし、男性を真似ることによって、女性が、女性の達することのできる偉大な高みに上がることは、ないことでしょう。女性は男性と補い合うべきなのです。」

・親の責任

すべての人間社会の基礎は、親と子どもの込み入った関係です。母親の義務は、時に大きな負担であっても、子どもを愛し、世話し、守ることです。このことは、自己犠牲的な愛だと仏陀は教えています。子育ては、実践的なことであり、ケアであり、寛容であり、無我（無私、セルフレス）です。仏教徒は、両親は、すべての植物や動物を大地が世話し育むように、子どもを世話し育むべきだと教えられています。

両親は、子どもの幸福と躰に責任があります。もし子どもが強く、健康に、人の役に立つ市民として成長するならば、それは両親の努力の結果です。もし子どもが不良に育ったならば、両親はその責任を荷わねばなりません。もし子どもが道を誤るならば、人は他人や社会を責めてはなりません。子どもを適切な道に導くのは、親の義務なのです。

こどもは、その最も多感な年代において、両親の優しい愛情やケアや注意を必要としています。両親の愛と導きがなければ、子どもは不利な立場となるでしょうし、この世界を生きていくのに途方にくれることでしょう。

しかしながら、両親の愛やケアや注意をそそぐことは、理にかなったものであれ、そうでないものであれ、子どものすべての必要を甘やかし満たすということを意味しません。あまりにも甘やかすことは、子どもをだめにしてしまいます。母親は、愛やケアを与える際、子どものぐずつきを取り扱うことにおいて厳しく確固とした態度でもあるべきです。厳しく確固とした態度であることは、子どもにつらくあたることを意味しません。愛を示してください。しかし、規律ある手で調節してください。子どもは理解することでしょう。

不幸なことに、今日の親たちの間では、親の愛はひどく不足しています。物質的な進歩と女性解放運動と平等への熱望とに、あまりにも突進する結果として、母親たちは、自分たちの子どもの面倒を家で見続けることよりも、オフィスや店で働いて時間を過ごすことを、夫たちに加わって行っています。子どもたちは、親戚かあるいはお金で雇われたシッターの世話に任せられ、母親のやさしい愛やケアを拒まれていることに当惑しています。

母親は、注意の不足について罪の意識を感じながら、子どもが必要とする類のものをすべて与えることで子どもをなだめようとします。そのような行為は子どもをだめにしていきます。戦車やマシンガンやピストルや剣のような現代のあらゆるおもちゃを子どもに与えることや、そのような器具を妥協策として与えることは、心理的に良くないことです。

そのようなおもちゃで子どもをとりこむことは、母親の優しい愛や情愛の代わりにはなりません。親の愛情と導きが欠けていたら、もし子どもが結果として不良に育ったとしても、驚きではありません。そのとき、誰が強情な子どもを育てた責任を持つべきでしょうか？もちろん親です！働いている母親は、特にきつい一日中のオフィスでの仕事のあとで家事に従事する働いている女性は、ケアや注意を渴望している子どものために時間を見つけることはほとんどできないことでしょう。

子どもために時間を持つことのできない両親は、老いた時に子どもが自分たちのために時間を割いてくれないことに不平を言うべきではありません。子どもために多くのお金を使ったのにと不平を言う親は、しかし、自分たちの「忙しい」子どもたちが、次々に、老後のための高価な家を離れ去っていくことに対して、不平を言うべきではありません。

ほとんどの女性は今日、家族がより物質的なメリットを受けることができるために働いています。彼女たちは、ガンジーが男性に対して与えたアドバイス、必要からの自由よりも貪欲からの自由を求めるべきだというアドバイスを、真剣に考慮すべきです。

もちろん、今日の経済状況を前提にすれば、一部の母親たちが働かざるを得ないことは否定できません。そのような場合は、彼らが外にいて時の子どものさみしさを埋めるために特別な犠牲を父親と母親とが払うべきです。もし両親が子どもと家において働かない時間を過ごすならば、親と子どもとにより理解が生じることでしょう。

仏陀はその教えの中で、親が守るべき大事な指針として、ある重要な義務と働きをあげています。その主要な指針のひとつは、教えや実践や行為によって、子どもを悪いことから遠ざけるように導き、優しい説得を通して、家族や社会や国のためにあらゆる善いことを行うように指導することです。このつながりにおいて、親は子どもの扱いに大きなケアを発揮せねばならないことでしょう。

親が言葉で言うことではなく、本当に親がどうであるか、何をするかを、子どもは無意識、あるいは愛情をこめて吸収します。子どもが世間に入っていく入口は、親の振る舞いを見習うことで形作られます。善いことが善いことを生じさせ、悪いことが悪いことを生じさせるのは、当然のことです。子どもと多くの時間を過ごす親は、その性格を微妙なところまで子孫たちの性格に伝えうつしていくことでしょう。

・親の義務

子どもの幸福に配慮することは親の義務です。実際、親の本分を自覚し、愛情のある親は、喜んでその責任を荷います。正しい道へと子どもを導くことにおいて、親はまず模範を示すべきで、望ましい人生に導くべきです。立派でない親から立派な子どもを期待することはほとんど不可能なことです。前世から引き継いだカルマによる傾向を除けば、子どもは親の欠点と美德をいつも受けついでいるものです。責任ある親は子孫に望ましくない傾向を伝えうつさないようにあらゆる用心をすべきです。シガーラ教誡経（善生経）によれば、親によってなされるべき五つの義務があります。

1、第一の義務は子どもが悪いことをしないように思いとどませること

家庭は最初の学校です。そして、両親は最初の先生です。子どもは常に親から、善いことも悪いことも教育のイロハを受けます。無頓着な親は直接にしる間接にしる、嘘やずるや不正直や誹謗や復讐や無知や、悪や不道德な行為への恐れを知らない態度へのイロハを、幼年時代の間の自分の子どもに告げ知らせます。親は手本となる振る舞いを示すべきです。子どもの多感な心にそのような悪徳を伝えうつすべきではありません。

2、第二の義務は善いことをするように子どもを納得させること

親は家庭において先生です。先生は学校において親です。親も両親も両方とも子どもの将来の幸福に責任があります。そして、子どもたちがどのような存在に仕立てられるかについての責任があります。子どもたちがどうあるか、そして子どもたちが将来なるであろう状態は、大人がどうあるかによります。子どもたちは多感な時期の間、大人たちの生徒です。

子どもたちは、大人たちが告げ知らせることを吸収します。子どもたちは、大人たちの歩みに従います。子どもたちは、大人たちの考え、言葉、行いに影響されます。そういうわけで、家庭と学校の両方において最も快適な雰囲気を生み出すことは、親のつとめです。

簡素、従順、協力、統一、勇気、自己犠牲、正直、まっすぐであること、奉仕、自己信頼、親切、貯蓄、満足、良いマナー、宗教的な熱心さ、その他のこういった類の美德は、若い人々の心に徐々に繰り返し教え込まれるべきです。そのように植えられた種は、ゆくゆくはたわわな実のついた樹となることでしょう。

3、三番目の義務は子どもに善い教育を与えること

品格のある教育は、親が子どもに遺すことができる最良の遺産です。それよりも価値のある宝は存在しません。親が子どもに贈ることのできる最良の恵みです。教育は、なるべく若い時から、宗教的な雰囲気の中で、子どもに与えられるべきです。このことは、子どもの人生にとっても大きな範囲の影響を及ぼします。

4、四番目の義務は親がぴったりの人と結婚していること

結婚は生涯全体に関わる厳粛な行為です。この結びつきはたやすく解消されることのできないものであるべきです。したがって、結婚は、結婚式の前に、全当事者を満足させるかどうかについて、あらゆる角度や側面から観察されるべきです。仏教徒の文化によれば、義務は権利に優先します。両方の当事者は頑なになるのではなく、懸命な思慮を用い、友好的な和解に至るようにしましょう。さもなくば、お互いへの呪詛やそういった類の応酬となることでしょう。病気の感染よりうつりやすいのは子どもへの影響なのです。

5、義務の最後のものは、適切な時に子どもたちに財産を譲り渡すことです。

親は、子どもたちの面倒をまだ見ている間に、愛し面倒を見ることだけでなく、将来の快適さや幸せのための準備もします。親は個人的にはつらい事にも耐えて財産を蓄え、喜んで子どもたちにそれらを遺産として与えます。

・慈悲の宗教

仏教は慈悲の宗教です。親は子どもにそのようなプレゼントをすることを忘れるべきではありません。仏陀はこの世界への慈悲のゆえに法（ダンマ、ダルマ）を教えました。子どもを育てる中で、親は、仏陀によって教えられた「四つの崇高な心の状態」（四無量心）を実践すべきです。

「四つの崇高な心の状態」（四無量心）とは、

- 慈（メッター） — 愛情のこもった親切、善意
- 悲（カルナー） — あわれみ
- 喜（ムディター） — 共感的な喜び
- 捨（ウペッカー） — 平静、あるいは「動じない心」

これらの四つの状態は、よく実践されれば、子育ての困難な時期を通じて親が穏やかさを保つことに役立つことでしょう。これが、生きとし生けるものに対しての、正しく望ましい行為のありかたです。これらの心の四つの態度は、社会との接触において生じるあらゆる状況のための枠組みを提供します。

この四つの態度は、社会のいざこざの中で、緊張を大きく緩和させますし、大きく平和をつくることに貢献しますし、生存のための争いにおいて受けた傷を大きく癒してくれるものです。この四つの態度は、社会的な障壁を平等にするものであり、調和あるコミュニティの建設者であり、長い間忘れられてきた眠りこけている包容力を目覚めさせるもの、長い間捨て去られてきた喜びと希望を復活させるもの、エゴイズムの力に対して人間の同胞愛を促進するものです。

結婚したカップルが直面しなければならない最も大きなチャレンジは、おそらく、適切に子どもを躾けることです。これは、私たちが動物と区別する側面です。動物は、大きな献身をもって子どもの面倒をみますが、人間の親はそれよりも大きな責任があります。その責任というのは、心を育てはぐくむということです。

仏陀は人間が直面する最も大きなチャレンジは心を飼い馴らすことだとおっしゃっています。子どもが生まれてから、幼児から青年期を通じておとなになるまで、親には子どもの心の発達に第一の責任があります。人が、人の役に立つ市民になるか、あるいはそうでないかは、主にその心がどの程度まで成長してきたかによります。

仏教においては、良き親は、自らを支えるために、そして親の立場と密接な関わりがあることに関する大きなフラストレーションに打ち克つために、四つの偉大な徳（四無量心）を実践することができます。

子どもがまだよちよち歩きの頃は、自分に必要なことを表現できませんし、痲癩や泣き叫んでばかりになりがちです。慈しみという第一の徳を実践する親は、そのような困難な期間に、自らの平和を保ちながら子どもを愛し続けることができます。この慈しみの影響を受けている子どもは自然と自分自身も慈しみを四方に放つことを身につけることでしょう。

子どもが思春期となりより成長してきたら、親はカルナーつまりあわれみを子どもに対し実践すべきです。子どもにとって思春期・青春期はとても困難な時期です。子どもたちは成人期に達し、それゆえに反抗的になり、親に対して大きな怒りやフラストレーションを持つようになります。

あわれみの実践で、親は、この反抗は成長の自然な部分だということを、そして子どもは故意に親を傷つけようとしているのではないことを理解する事でしょう。慈しみとあわれみを受けている子どもは、自分自身善い人間に成長することでしょう。自分をひどく嫌悪することもなく、子どもは慈しみとあわれみばかりを他の人に対してそそぐことになることでしょう。

おとなになる前に、子どもはおそらく、家の外における、いくつかの試験に合格したり、活動において成功したりすることでしょう。これは、親が共感的なよろこびを実践する機会です。現代の社会においては、あまりにも多くの親が自分たちの子どもを知人との競争に用いています。彼らは、子どもを利己的な理由で成功させようとするのです。自分が他人からよく思われたいことがその全理由です。

共感的な喜びを実践することによって、親は不純な動機を持たずに、子どもの成功や幸せを喜ぶことでしょう。そうした親はただ単に、子どもが幸せなので、幸せなのです！共感的な喜びの影響を受けてきた子どもは、自分自身、他人を羨まず、過剰に競争的にはならない人間になることでしょう。そのような人は、利己心や貪欲や憎しみを心に持つことがなくなることでしょう。

子どもが大人の時期に達した時、そして自分自身の職業と家族を持った時、親は平静（ウペッカー）という最後の偉大な徳を実践すべきです。これは、アジア人の親が実践することが最も難しいことのひとつです。彼らにとって、子どもが独自に独立するようになることは受け入れることが難しいのです。

親が平静を実践する時、子どもの事柄に干渉しないようになるでしょうし、子どもが与えることのできる時間や注意をより多く利己的に要求することもなくなることでしょう。現代社会における大人になりたての人々は、多くの問題を抱えています。

若いカップルに理解のある親は、若いカップルたちに不必要な要求をして余計な重荷を負わすべきではありません。

最も重要なことですが、年配の親は、結婚した子どもに対し、親孝行の義務を怠っていると感じさせることで、罪の意識を感じさせようとするべきではありません。もし親が平静を実践するならば、親は老年期においても穏やかであり続け、それゆえに若い世代の尊敬を得ることでしょう。

親が子どもに対してこれらの四つの徳（四無量心）を実践する時、子どもは好意的に応答をし、楽しい雰囲気家を家に広げることでしょう。慈しみとあわれみと共感的な喜びと平静さが存在する家庭は、幸せな家庭となることでしょう。そのような環境で育った子どもは、人の気持ちを理解できるように育つことでしょうし、思いやりのある、自発的な働き手、思いやりある雇い主に育つことでしょう。これは両親が子どもに与えることができる最大の遺産です。

・現代の社会における親

現代の社会についての最も悲しいことのひとつは、高度に産業化された国々における親の愛の不足であり、そのことから子どもたちが苦しんでいることです。カップルが結婚するとき、彼らは通常は幾人かの子どもを持つことを計画します。そしていったん子どもが生まれると、親は能力の限りを尽くして子どもを育てる道徳的な責務を持ちます。

親の責任を見るにあたっては、子どもを物質的に満たすことだけでなく、精神的な、心理的な側面で満たすことを見ることもとても重要なことです。

親の愛や注意を与えることと比較する時、物質的な快適さを与えることは、副次的に重要なことです。そんなに裕福ではない家庭で、子どもをたっぷりの愛情で良く育てている多くの親たちについて、私たちは知っています。一方、多くの金持ちの家族では、子どもにあらゆる物質的な快適さを与えてはいますが、親の愛が欠如しています。そのような子どもは心理的・道徳的な発達に欠けたままただ単に成長してしまうことでしょう。

母親は、働く母であり続けても、あるいは主婦であり続けようとも、子どもの幸せにすべての愛情とケアを与えることを注意深く考慮すべきです。（不思議なことに、一部の現代の母親たちは、子どもを抱いてかわいがるべき時期に、そして子どもを、良い市民として、法を遵守する市民として躰けるべき時期に、銃やその他の破壊的な器具を扱う訓練を受けています。）

子どもに対する現代の母親の風潮や態度は、親に子が示すことが期待される、古来からの親孝行をも、むしろもうとしています。哺乳瓶で育てることが母乳で育てることによって代わったことは、母と子の間の愛情を減らすことを助長する別の要因ともなりえます。

母親が母乳で育て、赤ん坊を両腕で抱いてかわいがっていた時は、母と子の優しい情愛はずっと大きく、子どもの幸福に対して母親が持っていた影響力ははるかにはっきりしたものでした。

このような環境のもとでは、親孝行や、家族の結びつきや親に従うことは、必ず存在していました。これらの伝統的な特質は、子どもにとって良いことであり、子どもの幸福のためでもあります。子どもを扶養することができるかどうかは、親、特に母親次第です。母親は、子どもが良く育つかかわがままに育つかに責任があります。母親は不良を減らすことができるのです！

・親のコントロールについて

多くの親は、結婚した子どもを自分のコントロールのもとに置き続けようとします。そうした親は、当然の自由を子どもたちに与えず、若い結婚したカップルの人生に干渉しようとします。親が結婚した息子や娘をコントロールしようとし、厳しく子どもたちの生き方を自分に従わせようとする時、そのカップルの間との不幸のみならず、二つの世代の間に多くの誤解も生み出すことでしょう。

親は子どもに対する愛情や愛着によって善意でそうしたことをする場合もあるかもしれませんが。しかし、そうすることで、彼らは自分自身と子どもたちに多くの問題を招いています。

親は、子どもたちが自らの人生と家族の責任を担うことを認めねばなりません。たとえば、もしいくつかの種が樹の下に落ちたら、草木はそのうち成長するかもしれません。しかし、もし元気に自由にそれらの草木を育てたいならば、それらの草木が親の木の陰によって妨げられないように、離れて成長できるどこか他の広い地面にそれらの草木を植えかえなくてはなりません。

宗教的な師や、賢い人々や、自分自身の試行錯誤を通してこの世界への知識を育ててきたお年寄りたちによって与えられたアドバイスの基づく、昔からの智慧を、親たちは無視するべきではありません。

・離婚について

離婚は異なる宗教に従う人々の間で論争となる事柄です。ある人々は、結婚はすでに天において記録されており、したがって離婚を認めることは正当ではないと信じています。しかし、もし、悲惨な人生を導き出すことなくしては、より嫉妬や怒りや憎しみをより持つことなしには、夫と妻が本当にもともに生きることができないならば、彼らは別れて平和に生きる自由を持つべきです。

・子どもに対する責任

しかしながら、カップルの離婚は、納得のいく解決の採用と、より憎しみを生み出さないようにすることで、理解のある雰囲気の中でなされなければなりません。もしカップルが子どもを持っているならば、子どもにとってより心の傷とならない離婚にし、新しい状況に子どもが適応できるように助けるべきです。そして、子どもの将来と幸福のための世話を確約することが最も大事なことです。もしカップルが子どもを放棄し、悲惨な人生に子どもが導かれるのをそのままにするならば、それは非人間的な態度です。

・仏教徒の見解

仏教においては、もし夫婦がともにむつまじく生きることができないならば、夫と妻が離婚すべきではないと主張するいかなる規則もありません。しかし、もし人々が、お互いに対する義務を実行することについての、仏陀が与えたアドヴァイスに従うならば、離婚や別居のような不幸な出来事は決してそもそも起らないことでしょう。

過去において、宗教的な価値がとても尊敬されていたところでは、お互いへの尊敬と愛情と考慮に基づいた幸せな関係を育てるための仲の良い理解に達するために、西洋でも東洋でも、結婚したカップルの一部に今よりも大きな努力が払われていました。カップルは、自分たちの結婚に、心において慈しむという重要な特質を育て、つくりあげていました。離婚するケースはとても稀で、離婚は一方の当事者か他方の当事者の利己性を示しているという理由で不名誉なこととみなされました。

実際、仏教徒の国々では最近まで離婚するケースはむしろ稀なことでした。このことは主に、カップルがお互いに義務と責務を考慮していたことによりますし、また離婚は基本的にコミュニティによっておおむね是認されなかったことによります。多くのケースにおいて、結婚したカップルがトラブルのもとにある時、コミュニティの長老たちがたいてい集まってきて、状況をよくするために重要な役割を果たしました。

不幸なことに、今日の現代社会においては、離婚はありふれた実践のようになっていきます。ある国々では、離婚は流行でさえあります。離婚を恥や自分たちの人生を整えることの失敗とみなすのではなく、一部の若いカップルは誇りにしているようです。現代社会において、結婚における失敗の主要な原因は、自由の乱用と、パートナーの一方の過剰な独立や個人主義です。独立した生活にも制限がなければなりません。さもなくば、夫も妻も両方ともたやすく身を誤ることでしょう。

7章 一夫多妻制か一夫一婦制か

仏教徒は一人の妻を保つべきか、もっと多くの妻を持つことができるかという問題については、直接の答えは仏陀の教えの中からは入手できません。なぜならば、先に述べたとおり、仏陀は立派な結婚生活にいかに関与するかの価値あるアドバイスは与えているのですが、結婚生活に関するいかなる宗教的な規則も仏陀は定めていなかったからです。

ある特定の国の大多数によって承認されている伝統や文化や生き方は、私たちが生活に関連する何らかのことがらを実践する時に、考慮されねばならないことでもあります。一部の宗教は、男性は一人の妻だけを持つことができると言い、一方で他の宗教は一人よりも多くの妻を男性は持つことができると言っています。

仏陀は男性が何人の妻を持つことができるかについては何も言及してはいなかったのですが、結婚している男性が婚姻関係にある以外の女性のもとにおもむくことは、その男性自身の破滅の原因となること、およびその男性はおびただしい他の問題や騒動に直面しなければならないことを、仏陀ははっきりと説法の中で言及しています。

仏陀の教え方はただその状況と結果を説明するものです。人は、なぜあることがらが良く、あることがらが悪いかの理由について、自ら考えることができます。仏陀は何人の妻を男性が持つべきか、持たないべきか、人に強制するルールを定めていませんでした。しかしながら、もし国の法律が結婚は一夫一婦でなければならないと定めているならば、そのときはそのような法律が遵守されなければなりません。なぜならば、仏陀は彼の教えに従う人たちに、もしその国の法律がすべての人に有益なものであれば、国の法律を尊重すべきことを明白に述べているからです。

8章 新しい技術

・家族計画について

一部の宗教は、家族計画に賛成していません。それらの宗教は、家族計画は神の御意志に反していると言っています。仏教は、個人の選択に干渉しません。人は、避妊するためのなんらかの方法に従う自由があります。仏教によれば、ある身体的・精神的な条件が、妊娠が生じるためには存在していなければならないとされています。

これらの条件の中のなんらかのものが欠如している時は（たとえば家族計画が行われている時など）、いかなる妊娠も生じず、それゆえに生命は生まれません。

しかし、妊娠のあとは、墮胎は仏教においては容認されて「いません」。なぜならば、墮胎は、すでに胎児の形において存在している生命を消してしまうことを意味するからです。

・試験管ベビーについて

一部の人々は試験管ベビー（体外受精児）に関する道徳的な意味合いや宗教的な態度に興味を持っています。もし女性が通常の方法で子を宿すことができないならば、そしてもしその女性が現代の医療技術を用いることによって子を持つことを切望しているならば、仏教がそのことについて非道徳的だとか非宗教的だとか言うことはなんらありません。

宗教は人の知性に適切な信頼を与えねばなりませんし、もし人類にそれが無害で有益であるならば、新しい医療の発見に適応しなければなりません。先に述べたとおり、条件がそろえば、自然なものであれ人工的なものであれ、妊娠は生じることでしょう。

9章 道徳について

・婚前交渉について（結婚前の性交渉について）

婚前交渉は現代社会において大変な議論となっている問題です。多くの若い人々がこのデリケートな問題についての意見を知りたがっています。一部の宗教家は、姦淫とみなされるべきだと言い、他の宗教家たちは非道徳的で非正当なことだと言っています。

過去においては、若い少年少女は、結婚するまでは自由に行き来することを親が許してはいませんでした。結婚は親がお膳立てしまとめあげていました。もちろん、親がお金や社会的な地位や家族の義務やそういった事柄をもとに結婚相手を選ぶ場合、一部のケースにおいてはこれは不幸の原因ともなっていました。しかし、一般的には、親の大多数は、子どもが受け入れることができるような結婚相手を選ぼうと、大変一生懸命に努力していました。

今日、若い人々は自由に自分のパートナーと交際し、パートナーを探すことができます。若い人々は自分の人生において多くの自由と独立を持っています。このことはそれ自体としては悪くないことですが、一部の若い人々は、あまりにも若く、あまりにも未熟で、性的な魅力と真実の相性との間の違いを理解することができません。このことが婚前交渉によって問題が生じることの理由です。

セックスに関する事柄であまりにもだらしのないこともまた、現代社会において社会的な問題を生じさせています。その悲しむべきところは、現代人がフリーセックスについてまったく自由である一方で、一部の社会が未婚の母や、非嫡出子や、離婚に対してリベラルな態度を表明していないことです。

結果として、若い人々は、両性の自由な交際を促しているその同じ社会によって、罰せられ続けることになっています。そうした若い人々は、社会ののけ者となり、大変な恥と

屈辱に苦しみます。多くの若い少女たちが、自分自身の自由の犠牲者となり、西洋でも東洋でも重視されてきた昔から続いている伝統を破ったということで、自らの将来を台無しにしています。

婚前性交渉は、今日の若い人々の間で過剰な社会的な自由が行きわたっている結果として生じている、現代的な発達のためです。仏陀はそのような行為について、支持も反対もどちらも強くはしていません。しかし、すべての仏教徒、特に愛しあう男女と結婚を考慮している人々は、結婚の日まで貞節を維持するという昔から続く伝統的な考え方を遵守すべきだと考えられます。

人間の心は不安定で常に変化するものであり、不法な行為や無分別な行為は、もし合法的な結婚が期待通りに行われなければ、どちらの当事者にも不必要な害を与えることを引き起す結果となるでしょう。きちんと執り行われた適切な結婚の前においてどのような形であれセックスに耽ることは、若い人々を保護する立場の年長者たちに軽蔑されるであろうことは忘れてはなりません。

・性的非行について

在家の人々は、仏陀の教えにおいて、性的な非行を避けるようにアドバイスされています。その意味は、もし人がセックスをしたいと思うならば、いかなる暴力や強制や脅迫や恐怖を生じさせることを伴わず、しなければならないということです。パートナーを尊重している品格あるセックスライフは、仏教では反対されません。世俗の生活を放棄する準備がまだできていない人々にとって必要なことだと、受容されています。

仏教によれば、すでに結婚している人と不倫を行う人は、あるいは他の誰かと婚約している人や、親や保護者の保護のもとにある人と結婚以外の性交渉を行うことは、性的非行の罪があると言われていています。なぜならば、社会の規範を破ることになり、第三の当事者が、その人自身の利己心、あるいはその不倫相手の利己心の結果として、苦しむことになるからです。

・無責任な性的行動について

仏陀はまた、もし年をとった人が相手との年齢のつりあいを考えずに結婚するならば直面しなければならないであろう結果についても、言及しています。仏陀によれば、無責任な性的な行動は、人生の多くの側面においてその人の没落の原因となりうるものです。

この世界のあらゆる国々は、セックスの乱用に関して制限する法律をはっきりと持っています。繰り返しますが、仏教は、もし法律が公共の利益のためのものであれば、その国

の法律を尊重し遵守しなければならないことを提言しています。

10章 東洋と西洋

以下のことは、著名な日本人の著作者である庭野日敬博士からの抜粋です。著作の『人間らしく生きる』（英訳タイトル” The Richer Life”）の中で、庭野博士は東洋と西洋の両方の観点から愛と結婚についての事柄を取り扱っています。

「西洋においては、ロマンティックな恋愛に基づいた結婚はしばしば自然で時には理想的なものともみなされてきました。アジアにおいては、近年は、伝統的な見合い結婚をやめてロマンティックな配慮からパートナーを選んでいる若い人々の数が増えてきました。しかし、一部のケースにおいては、ロマンティックな結婚は短期間で離婚や不幸をもたらしています。その一方、見合い結婚はしばしば、満足と幸福をもってともに生活し働くカップルを生み出しています。

感情的なアピールにもかかわらず、すべてのロマンティックな結婚を無条件に成功と呼ぶことはできません。ロマンティックな恋愛は、薪の明るい炎が燃え上がり明るくはじけるものの、わずかな短い間しか続かないようなものです。

夫婦の愛というものは、炭火の暖かな火のように、静かにゆっくりと燃えるものです。もちろん、明るく燃え上がる愛はありえますし、理想的にはそうであるはずでしょうが、ゆくゆくは穏やかになり、長く続く成熟した愛情の火になっていくものです。しかし、しばしばロマンティックすぎる恋愛の炎は、うまくいく結婚生活のためのあわれな基盤となる灰だけをのこして、急速に消えてしまいます。」

「恋愛している若い人々は、感情だけで考えます。彼らは自分たちをその瞬間の感情の明るい光でのみ見つめます。若い人々が考え行うことはすべて、ロマンティックなものであり、彼らが結婚後に担う人生の実際の出来事にほんの少ししか忍耐力を持っていません。

もし恋人たちが、十分にお互いに気の合う人柄を持ち、健康であり、人生について同じような考え方を抱いており、利害を分かち合っており、両方の実家と調和した家族関係に恵まれており、家計が安泰であれば、当初の情熱が落ち着いたあとであっても、彼らはその後も依然としてともに善い人生の基礎を保つことでしょう。もしそんな風に恵まれてないのであれば、結婚の失敗に直面する場合があります。」

「デートや、情緒的な映画、ダンス、パーティーといった時期が過ぎ去った時、若い結婚したカップルは、ともに生活し、食事を分かち合い、長所だけでなく欠点もお互いに明らかにしなければなりません。彼らはともに人生の半分以上の日々を過ごさねばならないことでしょう。この類の生活には、デートや初恋のほとんど骨折りのないことがらとは異なる

った必要が生じます。」

「家族関係は結婚生活においてとても重要になります。将来の結婚相手の母と父の人柄について考えることは必要なことです。若い人々はしばしば、強い愛があれば、最も喧嘩好きな人や無法な人とも仲良くやれるだろうと考えます。しかし、それは必ずしも真実ではありません。つまり、ロマンスは一定期間の事柄であり、事実根ざしておらず、継続的な献身においてともにカップルを結び続けるためには、仕事と環境が必要であり、それらに従ってカップルは制限されなければなりません。その二つの種類の愛は異なっているものです。一方を他方と勘違いすることは重大なトラブルを招きます。」

「結婚を考えている人の本性について真剣に冷静に検討することは、失敗の可能性を学ぶことです。結婚のあとでロマンスが消え去らないようにするためには、カップルの間の相互理解が不可欠です。しかし、うまくいった結婚のパーセンテージは、親の認めたパートナーを選んだ若いカップルにおいてより高いものです。平和に生きるためには、ロマンスと結婚の愛の間の違いを自覚することが必要です。」

1 1、独身主義（宗教的理由による独身）について

・独身主義とは何か？

独身主義とは、性的な行為の快楽を抑制することです。一部の仏教への批判は、その仏教の教えは自然に反していると言って、セックスライフは自然なことだし、それゆえに必要なことであると申し立てています。

仏教はセックスに反対していません。セックスは自然な感覚的な喜びであり、世俗的な生活におけるとても大きな部分を占めています。

人は質問するかもしれません。なぜ仏陀は戒めとして独身主義を提唱したのかと。独身主義は不当で自然に反したことはないかと。

精神的な成長のための独身主義の遵守は、仏陀の時代においては新たな宗教的な戒めではありませんでした。その他の当時存在していたすべてのインドの宗教もまた、独身主義の実践を導入していました。今日でさえ、ヒンドゥーやカトリックのような一部の他の宗教家は、宣誓して独身主義を遵守しています。

世俗の生活を断念した仏教徒は、自発的にこの戒めを遵守します。なぜならば、それらの人々は、もし人が家族関係のある生活に自らをコミットさせるならば、伴ってくる責務や障害に十分に気付いているからです。結婚生活は、セックスへの渴望や愛着が心を占め

て、誘惑が心の平安と清らかさを覆ってしまう時、精神的な進歩に影響を及ぼし抑えてしまうことでしょう。

・独身主義の意義

人はよく尋ねます。「もし仏陀が結婚生活に反対の説教をしていなかったのならば、なぜ仏陀は守るべき大事な戒めのひとつとして独身主義を主張したのか、また、なぜ仏陀はセックスを避け世俗の生活を捨てるように人々にアドヴァイスしたのか」と。

人は、仏教においては世俗生活の放棄は強制ではないことを忘れてはなりません。仏教を実践するために世俗生活を完全に放棄することは義務ではありません。あなたは、特定の宗教的な原則や特質を実践することによって、自らの理解に従って自分の生き方を調整することができます。

あなたは、在家生活の必要に基づきながら、自らの宗教的な原則を進歩させることができます。しかしながら、より大きな智慧に進み達した時、そして在家の生き方は精神的な価値の究極的な発達と心の浄化に役に立たないと自覚する時、あなたは世俗生活を放棄し、精神的な発達により集中することを選択するかもしれません。

仏陀は、セックスと結婚は究極的な平安と心の浄化に役に立たないので独身主義を勧めました。そして、もし人が精神的な進歩と高いレベルまでの完全性を得たいと願うならば、世俗生活の放棄は必要だと提言しました。しかし、世俗生活の放棄は、自然に來たるべきですし、決して強制されてはなりません。世俗生活の放棄は、自我が幻だという性質と、あらゆる感覚的な喜びは苦（満たされないもの）の性質を持つということへの、完全な理解を通して來たるべきです。

・「独身主義」対「責任」 仏陀の経験

仏陀は王子として、夫として、父として、出家の前に世俗の生活を経験しました。そして、結婚生活に必然的に伴うことを知りました。人は仏陀の出家（世俗生活の放棄）に対し、仏陀は利己的だし冷酷だし仏陀は妻と子を捨てるという点で正しくないと言って疑問を持つ場合もあるかもしれません。実際には、仏陀は責任感なしに家族を見捨てませんでした。

仏陀は決して妻との間に誤解を持ちませんでした。仏陀も、普通の人を持つと同様な、おそらくそれよりも深い愛と愛着を妻と子に持っておられました。異なっていたのは、仏陀の愛が単に身体的な愛や利己的な愛ではなかったことです。仏陀は功德（善い原因）のために情緒的で利己的な愛を離れることへの勇気と理解を持っていました。仏陀の犠牲（修

行)は、仏陀は個人的な必要や欲望をあらゆる時代のすべての人類に奉仕するために退けたという理由によって、ますます尊いものだとみなされます。

彼の出家(世俗生活の放棄)の主な目的は、自分自身の幸福や平安や救いのためだけではなく、人類のためでもありました。仏陀がもし王宮にとどまり続けていたら、仏陀の奉仕は家族や王国のみの範囲に限られていたことでしょう。以上のことが、仏陀が、平安と清らかさを維持するために、悟りに達するために、そして無知の中で苦しんでいる他の人々を覚らせるために、すべてを放棄することを決意した理由です。

悟りに達したのちに仏陀が最も最初に行った事のひとは、自らの王宮に戻って家族たちを覚らせることでした。実際、仏陀の若い息子のラーフラが仏陀に遺産を求めたとき、仏陀は、ラーフラは最も豊かな富を継承すべきです、それはダンマ(ダルマ、法)という宝です、とおっしゃりました。このようにして、仏陀は家族に奉仕し、家族たちが救いや平和や幸せへと進む道を整えておられました。

それゆえに、誰も仏陀が冷酷で利己的な父と言うことはできません。仏陀は実際に誰よりも慈悲深く自己犠牲的だったのです。仏陀が達した精神的な発達の高みにおいては、結婚は一時的な局面のものであり、一方、悟りは永遠なものであって、すべての人類の善のためになることだと仏陀は知っていたのです。

他の重要な事実は、仏陀は自分の妻と息子が自分がいなくても飢えないと知っていたということです。仏陀の時代においては、若い男性が世帯主の人生から引退することはまったく普通のことであり、名誉あることだとみなされていました。家族の他のメンバーは、喜んで彼の扶養家族の面倒をみました。仏陀が悟りを得た時、仏陀は他のいかなる父親も与えることができないもの、愛着への従属から自由になること、を家族たちに与えることができました。

12章 まとめ

結婚は二人のパートナーシップです。このパートナーシップは、二人の人格の成長が伴うことができた時に、豊かで一層充実したものになります。多くの結婚は、一方のパートナーが他方の「ツバメ」になろうとしたり、一方が全面的な自由を要求することで、失敗しています。仏教によれば、結婚はお互いの信条やプライバシーへの理解と尊敬を意味します。うまくいく結婚は、「でこぼこ」しながらも、いつも二人(双方向)の道です。難しいことですが、うまくいく結婚とは、いつもお互いさまの道のりなのです。

この国や他の国々の若い人々はしばしば、「古風な考え方」は現代社会には関係ないと考えています。彼らは、決して時代遅れにはならないいくつかの変わらない真理があると

うことを忘れるべきではありません。仏陀の時代の間に真実だったことは、今日もいまだに真実のままなのです。

大変に素敵なテレビ番組を通して、私たちが受け取っているいわゆる現代社会というものは、西洋において最も品格のある人々の考え方や振る舞い方を描写していません。東洋のカップルたちと同様にとっても敬虔で結婚について「保守的」な品格あるカップルたちは膨大な「サイレント・マジョリティー」（声なき声）となっています。彼らはマスメディアが描くような仕方では振る舞いません。すべての西洋の人々が一度の喧嘩や争いのあとに離婚や妊娠中絶に走るわけではないのです。

世界中の品格ある人々は同じです。彼らは無私であり、愛する人々を深くケアします。彼らは、幸福と安定した結婚を確かなものとするために、非常に大きな自己犠牲を払い、愛と理解を育みます。もしあなたが西洋を真似したいならば、「サイレント・マジョリティー」を真似してください。彼らはあなたの近所に住んでいる品格ある隣人たちとなんら変わりません。

若い人々はまた、年長者に耳を傾けねばなりません。なぜならば、結婚生活についての若い人々の理解は未熟だからです。若い人々は、結婚や離婚について、性急な結論をすべきではありません。若い人々は、多くの忍耐、寛容、相互理解を持たねばなりません。さもなくば、その人生は大変にみじめで問題のあるものにもなりかねません。忍耐、寛容、そして理解は、結婚においてすべての人々が守り実践すべき重要なディシプリン（訓練・規律・分野）なのです。

安全であり満足した感情は相互の理解から生じるものであり、そのことこそが「ハッピー・マリッド・ライフ」（幸福な結婚生活）の「秘訣」なのです。

補足 I、愛情深い母親

仏教のジャータカ（釈尊の前世の話、本生譚）の物語の中で、ソーナダンダという菩薩が、以下の調子で母の徳を歌います。

親切で、あわれみ深い、私たちの避難所。彼女は私たちが胸のうちで養ってくれました。

母は、天への道、母の愛こそ最上なり。

彼女は丁寧に私たちが養い育ててくれました。彼女は善き恵みに満たされています。

母は、天への道、母の愛こそ最上なり。

子どもを切望し、彼女は聖なる寺社に祈ります。

季節が変われば天文を調べ学びます。

身ごもっている時の間は、優しく成長を願います。

すぐにまだ意識のない赤子も愛情深い友だとわかり始めます。
一年かそれぐらいの間、彼女はとても丁寧に彼女の宝を守ります。
子を産むと、その日から母の名を身につけることでしょう。
母乳と子守唄でぐずつく子どもをなだめ、
心地よい暖かな腕でつつむと、赤ん坊の泣き声はすぐにおさまります。
まだかよわい無垢な赤ん坊を見守って、風にもあたらないよう、むずかることがないように、そのように赤子を慈しむ、母は育てはぐくむ者と呼ばれることでしょう。
彼の夫と力を合わせて、母は息子のために貯金し、
「いつか、私のかわいい子よ、すべてお前のものとなるのだよ。」と考えます。
「これをしなさい、あれをしなさい、坊や」と心配した母は叫びます。
子が大人に成長すると、母は嘆きため息をつきます。
夜に近所の人妻と会っていて見境ない雰囲気になっていないか、
彼女はイライラして、「なぜ明るいうちに戻って来ないの」と言います。
もし人が、このような心配とともに育ててくれた母を無視し、
嘘を言っていたら、どれほど悪しき運命となり、たとえ祈ろうとも、地獄を逃れることができようか？
あまりにも富を愛する人は、すぐに富が失われると言われていました。
母を無視する人は、すぐにそのコストが高くつくことに後悔することでしょう。
あまりにも富を愛する人は、すぐに富が失われると言われていました。
父を無視する人は、すぐにそのコストが高くつくことに後悔することでしょう。
恵み深い、贈り物や愛情深いことばや優しい世話、
いっどこでも示された心の穏やかな公正さ、
これらの徳は、この世界にとって、車輪の軸です。
これらの徳が欠けていても、なお母の名は子どもに呼ばれることでしょう。
種をくれた父のように母は尊敬すべき名誉を与えられるべきです。
賢者たちは男性にもこれらの徳があることが良いと考えています。
そのような両親はあらゆる称賛に値し、高い位置を保ち、
古代の賢者たちによって「ブラフマ」(梵天)と呼ばれます。
それほどにそうした親の声望は偉大です。
子どもに対して優しい親は、あらゆる当然の尊敬を受けるべきです。
賢い子は、親を尊敬し、良いことや真実をもって奉仕します。
子は親に飲みものや食べ物や、衣食住を与えるべきです
そして、風呂にもいれ、オイルを塗ってあげ、足を洗ってあげるべきです。
これらのような親孝行によって人は、この世では賢者たちによって讃えられ、死後は天界に生じて喜びを受けることでしょう。

(ジャータカ 英語訳 一卷 五章 173、174 頁)

補足Ⅱ、道徳的な規範

1、社会的道徳的な規範について

仏教徒の改革の最も重要な要素は、常にその社会的・道徳的な規範にありました。仏教の道徳的な規範はそれ自体、この世界が今まで知ってきた中で最も完璧なもののひとつです。この点においては、敵対的な陣営からも好意的な陣営からも、あらゆる証言が同意しています。哲学者は今まで存在してきましたし、宗教の説教者、精密な形而上学者、論争家は今まで存在してきました。

しかし、どこに私たちは、仏陀のような愛の権化を見出すことができるでしょうか？どこに仏陀のような、あらゆる地位と信条と肌の色の違いを知らない愛を、人間性の束縛さえも超えて、くまなく生きとし生けるものすべてを包容する愛を、普遍的な「慈悲」(マイトリー)や「不殺生」(アヒンサー、非暴力)の福音を、見出すことができるでしょうか？

(マックス・ミュラー教授 (ドイツの仏教学者))

2、道徳は自由に基づく

仏教徒の道徳は自由に基づいています。言い換えれば、個々人の発達に基づいています。それゆえに相対的なものです。実際、自分自身の外部の人によって強制されたり決定されるならば、あらゆる倫理的な原則はありえないことでしょう。

(アナガーリカ・B・ゴーヴィンダ (ドイツの仏教学者))

3、知識と道徳

仏教においては、知識なくして道徳はありえませんし、道徳の伴わない本当の知識もありえません。両方とも、炎における熱と光のようにおたがいに切っても切れない関係にあるのです。「菩提」(ボーディ、悟り、智慧)を成すものは、単に知性的な悟りではなく、人間性(ヒューマニティ、優しさ、慈悲)です。道徳にすぐれた意識こそ、「菩提」のエッセンスなのです。

(ダンマパーラ比丘 (オランダの仏教学者))